

幸せの羅針盤

SDGsと地域の未来

1面から続く

中古車をは入れても、すぐに走れるものだけではない。ヘッドライトがなかったり、泥だらけだったり。酒田市の水田プロダクツが営む再生工場には、手入れを待つ車が並ぶ。

数年の間だけ

同社はかつて自動車解体業が中心だった。「父親が始め、幼いころから車が解体されるのを見て育った」と永田剛男社長(59)。25歳で家業に入り、また走れる車が処分されることに、も

つたいなさを感じた。本業 車を使いたいという需要が 車として提供する事業だ。室内の清掃も徹底。もちろん は車社会。首都圏からの転 入ることが多かった。そこ 勤者や学生の中には、数 2000年頃に始めたのが 三の財は生活の足として 中古車を再生させ、リース リも出賃を抑えることがで 目は3割に上る。

愛情もってリース車に

「ビジネスだけではない」



永田プロダクツの再生工場。水没したワンボックスカーなども再び走れるよう整備を施す



「きっと車にも心がある」と語る 永田剛男社長

工場にあった一見また新しいワンボックスカー。スレる解体車両は700台程 ライドドアを開けると、中 度。このうち1割弱が再生 可能な車だという。再生工 場では解体した自動車から これを今から再生させる「 再利用できる部品を取り出 すと永田社長。エンジンルー し、消耗品は全て入れ替え ムも水に漬かり、シートは 一積み立てる。塗装も直交 換が必要だが、手入れを して外装を整え、消費など すればまた走らせることが

できるといふ。

レンタカーも

「ビジネスだけで車を見 てしまふと、この仕事はで きない。車への愛情をもっ て整備するよう社員には言 い聞かせている」。永田社 長は工場の車を見つめてこ う語り、続けた。「買って 売ってを繰り返すと、車の 価値は下がっていく一方。 だが、手を換はて整備し、 磨くことで再び車を吹き返 し、人の役に立つ物に生ま れ変わる」

同社では、リースだけで なく、より短期利用の需要 に対応するため、レンタカー 事業も始めた。こちらにも 再生した車を導入する方針 だ。リボーン・カーリース の利用者の中には、使い慣 れた車に愛着が湧き、売っ てほしいと願う出る人もい るという。「形には見えな いものを大切にしていきたい。車にも、きっと心があ る」。永田社長はそう繰り返 した。



(秋篠宏介)